



報國の精神と鋪裝及び道路愛護

本年一月號論說欄に在る水野會長「迎年の辭」中に「今次長期交戦を建前としたる事變費の爲めに一般事業費に極度の緊縮節約が加へられ道路事業も著しく國費の削減を見るの形勢に立ち至つたのであるが斯る情勢下に在つても交通上産業上将又國防上道路事業は之を等閑に付することは許されない所である、故に國民が現地將兵に對して犧牲均衡の見地に立ち道路の修理維持保存等道路愛護の如き或は簡易鋪裝普及の如き奉仕的作業に従事して銃後の備に努力しなければならぬことと言ふまでもない」と

路政春秋

述べられて居るが實に機宜を得たる割切の言であると思ふ。道路改良會が玆數年前から道路愛護事業の指導獎勵に留意せられ居ることは雜誌「道路の改良」に不斷地方の愛護事業を紹介せらるゝ事に依つても推知し得らるゝ所である、言ふまでもなく道路の改良が急速に進捗したるも其の維持保存上、修理維持、交通障礙物の整理、雜草の刈取、法手入、側溝浚深、排水の整備、路面不陸直し、砂利まき、嵩置き、切下げ、街路樹並木の手入、里程標等の修理作業の如きは必須的且繼續の仕事であることは勿論である、此等の仕事は盡忠報國の精神をもつて戦地にある兵士の上を偲びつゝ銃後にある國民の従事すべき一大義務であると

注
本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に渡らざる限り奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

謂ふも過言ではあるまい、又地方に於てトラツクやバスの交通日増に増加する情勢であるから交通上は勿論衛生上、農業上簡易方法に依つてでも路面鋪裝を施工することは焦眉の急務である。此事業もまた銃後國民の義務として奉仕的に施工しなければならぬ、夫れで折角水野會長の卓見を公にせられたる關係上此等事業の指導獎勵の爲めに道路改良會の役員各位が各地に出張せられ路面鋪裝道路愛護の普及徹底を講ぜらるゝことが緊切事であると愚考する、餘白があらば拙文なれと掲載せられんことを惘望する。

白禍か黄禍か

(西播生)

エチオピアが伊太利から攻撃せられた時
には東洋人は白禍を叫んだ、近頃日支戦争
に於て皇軍の嚮ふ所敵なきの觀がある、勿
論多大の犠牲を支拂ふことは明白な事實で
ある、夫れで白人側では我國に對して恐怖
と猜疑とにかられ遂に日本最負の英國のハ
ミルトン大將でさへ黃禍論を唱へておる、
抑も黃禍論とは黄色人種の進出によつて白
色人種に加へられる禍害を誇大に妄想した
謬論である、これがはつきり現はれたのは
日清戦役後のことである、日清戦役におい
て極東の新興島日本帝國の勝利に歸するや
俄然ドイツ皇帝ウキルヘルム二世が黃禍論
を唱へ出し日本を先頭として黄色人種が結
束發展し遂には古の蒙古のごとくヨーロッパ
にまで襲來して白人に總攻撃を加へるで
あらうと論じ従つて今に及んで東洋に干渉
し黄色人種の發展を阻止しなければならな
いと結んだ、後十年、日露戦役において白色
人種のロシヤが破られ日本帝國の國運ます

ます隆昌をきはめるに及んでヨーロッパ列
強の間には一層激しく黃禍か唱へられるに
至つた、その後一時下火となつたが日支人
の米濠移民問題が起つたとき今度はその内
容をかへて黃白兩人種の文明の差異生活程
度の低劣、その増殖率の大なること等をあ
げ専ら黄色移民排斥の據り所となした、世
界大戰後列國の植民地または半植民地化せ
る有色人種の住地に革命的民族運動頻發す
るに至り黃禍論は再び内容を轉じ今や有色
人一般の禍害を強説することになつた外蒙
古に於てのロシヤ、香港及び長江一帯に於
ての英國の動きは白禍にあらずして何か？

英語は不必要か、排 斥すべきか

日本の文化が英語に負ふ所の少なくない
ことは周知の事實である。若し英語を學ぶ
ことなかりせば果して今日の文化をもたら
し得たかどうか勿論ハイ取りデーとか事故

防止デーとか不必要なる英語は斷然排斥す
べきだ、乍去英語を解せざるの不便は苟く
も學徒たる者に取つて一大苦痛である、
時代の變遷は已むを得ない日英同盟を歡迎
したる當時に在つての英語熱は實に旺盛で
あつた、今日英外交の狡猾詭辯其の極に達
し東亞の平和を招來せんが爲めの我帝國の
被れる大なる犠牲を無視したるに愛想をつ
かして必要なる英語までも排斥し英語を學
ばんとするものを英國崇拜者として排斥せ
んとする風潮あるは聊か行過ぎたるものと
謂はなければならぬ、利用すべきは利用し
採用すべきは採用し、學ぶべきは學んで可
なりである。英語を學んだとて思想戰に於
て經濟戰に於て戦ふべきに於ては全力全心
を盡して戦ふべきである、徒らに興奮する
を戒め妄りに時勢に阿附するを慎むべきで
ある。

マダヴィウムの發見

米國では晝間の二割に過ぎない交通量の夜間に於て交通事故死亡者数は總數の六十パーセントを示すと傳へらるゝが其の原因や如何、九十二種の元素中未発見のものが二種あるが夫は第八十七番と第八十五番とである、所が最近第八十七番元素がフランスでホリア・フルベイによつて発見されたといふことが加州工業大學物理研究會の席上F・R・ハーシシュ博士によつて報告された。即ちフルベイは非常に強力な分光寫眞機を用ひ、セシウム鹽の中でこの新元素を發見したもので、彼はこれをマダグワイウムと命名したといふことである。若しこれが學界にうけ入れられるならば、未知の元素は一つしかないことになる。然しこれも、フルベイの用ひた強力な分光寫眞器でやがて発見されるであらうと、ハーシシュ博士は豫言して居る。交通事故の原因発見は何時か。

ありやなしやの珍聞

奇譚 (11)

○山本勘助の末裔 兵庫縣水上郡新井村田路觀音寺住職がある日同郡沼貫村稻畑寶光寺住職山本大鏡師を訪ひ「貴公は有名な山本勘助の末裔であるといふことを確かな筋から聞いたかと問ふたに始まつて終に大鏡師は秘して居つた家系を物語つた、夫れに依ると川中島の敗戦で責を負ひ勘助は自害し二代目秀綱は二十五歳の時片桐且元の推舉で秀吉に仕へ河内國今出郷を賜はり秀次公の側に仕へて居つたが文祿四年秀次が高野山で自刃した時殉死し六代秀武のころから代々因幡の城主池田侯に御典醫として明治改易の直前まで仕官して居つた、明治維新後一時千原で醫を業としておつたが大鏡師三歳の時父に四歳の時母に死別し長兄とも別れ／＼となつて一方ならぬ苦勞を重ね由緒の系圖や勘助自害の砌用ゐた短刀など

伯父から譲り受けたとの事である、實に大鏡師は十五代目であると謂はれておる。

○南朝の名僧覺禪の入寂地 高野山小野寺の住職で後醍醐天皇の御信任の厚かつた僧覺禪は覺禪抄百二十卷を著はした當時の名知識として佛教史上に著名な高僧であるがその晩年に就ては詳でなつた所、圖らずも中蒲村松町にある正圓寺に於て入寂した事が新潟郷土博物館長齋藤秀平氏の調査で判明した、發見の動機は齋藤館長が昨年偶々京都の南禪寺に遊んだ折開山の碑銘に「開基無關禪師越後國蒲原の正圓寺で得道、同じ蒲原の華報寺の住職となる」とあるを見て正圓寺、華報寺(中蒲出湯村)の調査を思ひ立ち去月末から火災のため記録等の烏有に歸してゐる兩寺を隈なく調査した所、正圓寺に古石塔三基を發見した、拓本に寫して苦心の末讀まれたのは覺圓三位(正慶二年)靈海三位(文保三年)當山法橋覺禪三位(元亨三年)と言ふ住職の戒名であつ

た、此の中前の二僧の經歷は一切不明であるが覺禪こそは南北朝の頃一代の碩學と仰がれた名僧と認定された、越後國は、當時新田義貞の遺臣が蟄居して足利氏に反抗して居り村松附近には新田の殿臣川内政光の陣屋があつた事から推して吉野朝復興の秘命を帯びて來越した覺禪である事に間違ないと確認される、吉野朝廷の復興を圖つて遂に志を得ずその儘正慶二年今から六百年前恨を吞んで正圓寺に入寂したものであらうとの事である。

○珍木ぐみの木 神奈川縣下湯河原町城堀青年會場前の樹齡三十年生の櫻樹の枝先に「ぐみ」の木が悠然(?)と實にのび／＼として寄生し枯枝の様になつた櫻の木に一人(?)緑の葉を房々と抱へて往來の人々を見おろしてゐる全く珍風景である。これは最近になつて發見されたもので寄生の原因は小鳥類がぐみの種を持ち運んだものと見られるが櫻の木の寄生は珍らしい事である。

新春漫吟

初 暁

鯉木の輝きけらし初御空
初空や沖ほの／＼と貢船
放送は宗家なりけり初
鼓かかぐ花の袂の松囃子
松過ぎの淋しき門や小雨降る
松過ぎの羽子疎ましく日晴れけり
市となりし我郷里嬉し藪入りぬ
藪入の兄は遅れて來りけり
春場所の稽古はづみぬ日和哉
觸れ太鼓春場所の日はや迫る

巴 藤

左義長の煙るや森に日のもるゝ
遠山は雪なり背戸のどんどの火
錢龜の逡巡として春の泥
釣り糸に菜屑かゝりぬ春の水
背戸の川菜屑の邊に温みけり
藪入やわが家まともに橋の成る
初夢を拗ねて語らぬ姉にくし
書初やはじかむ兄の遅しき
雪にあげて映ゆる参賀の軍人
彈初や今を昔と母老ひぬ
初夢にわれと悲しむ女あり
麻雀に日記空しや松の内